
幽雅に咲かせ、冥々の西行妖

冥界寺吹雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽雅に咲かせ、冥々の西行妖

【Nコード】

N1769D

【作者名】

冥界寺吹雪

【あらすじ】

西行妖。満開になるとなんらかの封印が解かれるという、冥界の桜。冥界の姫、西行寺幽々子は春を集め、妖を満開にさせようとするが……

序幕（前書き）

この作品は東方プロジェクトの二次創作です。知らない方向けに執筆する予定ですので、ご安心下さい。

序幕

その夜、桜の花びらが散った。

その花びらはやがて土となり、大地に生き続けた。

まるで、人の命のようだ。どんなに美しく咲き誇っても、やがては
儚く散りゆくのが運命。永遠など存在しない。

その儚さ故、人は桜に魅せられるのだろう。桜が永遠であればその
美しさは当然のもの認識され、見向きもされないのだから。

その美しさがまた、どれだけ脆いものなのかを人間は知らない。

満開になると封印が解かれるという伝説を持つ桜、西行妖。人間が訪れることのない冥界に、それはあった。

いつか咲き乱れる時がくるのだろうか。狂い咲き、そしてまた儚く散ってしまうのだろうか。

妖は今日も、満開の刻を待ち続けている・・・

前編

顕界ではまだまだ冬の真っ只中という今日この頃、冥界は桜吹雪が華麗に舞い踊っていた。一足早い、春の訪れである。しかしこの盛大な春の訪れは絶対的なものであり、また人為的なものでもあった。

「幽々子様、もう顕界にも春は残ってませんよお」

まだまだ幼い、しかし芯の通った声が聞こえる。

「あら、そう。まだ春を隠し持った人間がいるから安心しなさい」

今度は大人びて、どこか透き通ったような声。幽々子と呼ばれた少女はそう言っと、縁側に置いてあった桜餅に手をつけた。

「・・・あ、妖夢。ついでお餅も無くなりそうだから調達してきて頂戴」

「半分人づかいが荒いですよ・・・」

妖夢と呼ばれた少女は、はあ、と深いため息をつくと小走りで桜並

木の階段を駆け降りていった。

これだけ冥界が春に包まれているのは、妖夢が顕界の春を奪い集めているからである。おかげで顕界では春がなかなか訪れず、ちよつとした異変として騒ぎになっているのだが、当の妖夢と指示をする幽々子はあまり気にしていない。

「早く、満開になるといいわね・・・」

独り言のように呟くと、一際高く大きい桜を見上げる。八分咲きといったところか、それでも他の桜に比べるに及ばない程豪快に咲き誇っている。

「で、ここを通して頂戴」

「通せだぜ！」

「通していただきましょう」

冥界と顕界の境となる巨大な門。その場に響く、個性の溢れる三つの声。

「ここから先はあなたたち生きた人間の来るところでは無いわ」

先程の、幼く芯の通った声。

「どうしても通りたいというのなら、あなたたちの持つなけなしの春を貰っていく！」

妖夢はそういうと、剣を構える。長く、淡く光るその剣は妖刀そのものである。

「お？悪者退治は我々ヒーローのお仕事だぜ」

白黒の服の人間が言う。

「あら、黒は大体悪役と聞きましたけど・・・」

と、メイド姿の人間。

「やっぱりヒーローは赤よね。おめでたいし」

紅白の巫女衣装が言う。全く、これから戦うというのに緊張感がない。

「この楼観剣に斬れぬものなど、あんまりない！」

冥界の門は、ただ静かに佇む。

九分咲き。満開も、指を数えているうちに訪れそうなほどに妖は咲き乱れていた。春が、近づいているのだろう。

はつきりいつてしまうと、妖夢はあまりアテにしていなかった。残り少ない春を保持しているものが、易々と倒れてくれるはずがない。

妖を満開にしようとするのは、実は完全に興味本位というわけではない。幽々子とこの西行妖は、何かが同じなのだ。勘、気のせいといえはそれまでだが、幽々子は何の根拠もない確信のようなものを持っていた。

そろそろ妖夢も帰ってくる頃だろう。どう転がってもここに春がくるのは変わらない。帰ってくるまでに一眠りするのもいいかもしれない。これだけの桜吹雪が舞う中での昼寝はさぞ気持ちいいだろう。

満開は、もう近い

前編（後書き）

あやかし　さいぎょうあやかし
妖とは西行妖のこと。念のため

中編

その日、彼女は死んだ。怖いとか苦しいとか、そういう感情を一切持たなかったことは幸いであつた。

しかし、残された者達は悲しみにくれた。人が死ぬことは今も昔も変わらず、辛く悲しいものである。

人は、何らかの形で死者の存在を顕界に留めようとする。形見だとか、墓だとか、そういう習慣が現在も残っている。

彼女にもそれをした。ただ、それはあまりにも恐ろしい方法だった。

残された者達は、彼女の亡骸を封印に使ったのである。

封印を行った者が死ねばその封印はとても脆くなる。ちょっとした拍子で解けてしまうことが殆どなのだ。

封印者の死後、亡骸の眠る場所には巨大な桜が咲き誇った。何人をも魅了するその美しい桜はしかし、どこか脆い部分があつた。

そして、桜は死んだ。

結局封印が解けることなく桜は死んでしまった。多くの人間が心配していた封印解除も起こることなく、事態は収まった。

その考え自体が脆いとも知らず。

「やっと見つけたわよ。異変の黒幕」

幽々子はまた静かに桜を見上げていた。

「全く、あんた達のせいでいつまでも冬全開じゃないの。お仕置きはたっぷり受けてもらうから」

少し目線を下げると、三人の少女が立っていた。いつまでもこちらに目線を向けている。

「・・・白玉楼にようこそ。遠いところからわざわざ春を運んできて・・・」

白黒の少女が、気に食わないといった顔をして、

「こいつぁお前らにホイホイ渡すために集めた春じゃないぜ？勘違いも甚だしい」

「あらそう。じゃあそんなけなしの春、何に使うのかしら？」

すると白黒の少女は何故か満面の笑みで

「暖房代わりに決まってるんだぜ！」

「もとい、あなたに警戒されないためよ」

メイド少女が割り込み、さらに続ける。

「冬の空気を纏って訪れたらすぐに見つかってしまおうでしょう？」

幽々子は妖しく笑みを浮かべた。

「何が、おかしいのよ？」

幽々子はやはり笑みを浮かべながら

「・・・春でカモフラージュしたってことかしら？うふふふ、本当にそれで見つからずにここまで来れると思って？」

からかうように、そう言った。それに　と、幽々子は続ける。

「貴女達は一つ、間違いを犯した」

その声に、誰もが鳥肌を立てた。怯んでいないと言えは嘘になるが、紅白の巫女は冷静に問う。

「あら、果たしてそれは何かしら？」

「死後の世界に踏み込んだこと」

いつの間にか、幽々子を包み込むように大量の蝶が舞っていた。不気味に赤く、青く光る色とりどりの蝶は、見ているだけでも毒々しい。

「気をつけて。こいつらに触れると何かとやっかいよ」

巫女が咄嗟に言う。

「ご名答。触れたものを死に誘う冥界の蝶、死蝶」

どこから湧いて出てくるのか、蝶は時が経つと共にその数を増してゆく。三人の少女はそれを避けつつも幽々子の姿を捉えている。

「・・・駄目、隙がないわ」

「隙なんざ、スパークでぶちあげればいい話だぜ！」

避けてはやみくもに攻撃をしてみても、霧の如く視界を鈍らせる死蝶を拡散させるにすぎなかった。

「どんなに強く、鋭く、速い攻撃も当たらなければそれは見世物。どんなに弱く、鈍く、遅い攻撃も相手を捉えればそれは凶器。それがわからないようでは、死を操ることなど到底不可能」

幽々子を纏う死蝶の群れが、一層その厚さを増す。

「舞い散りなさい。バタフライデイルージョン」

全ての死蝶が弾け、三人の少女を包み込んだ。巨大な竜巻を彷彿とさせる死蝶の柱は、内にある全てのものを切り刻み、そして舞い散らせる。美しくも由々しいそれは、見るもの全ての瞳に焼き付く。

「ここは白玉楼。ようこそ、死後の世界へ」

同時、死蝶の全てが地へと舞い戻った。

「私の結界に易々と・・・何なの、この蝶は」

「流石は霊夢の結界だぜ。あちこちから蝶が割り込んできやがった」

「時を止める隙すらない・・・。どうするのよ霊夢」

各々衣服を刻まれて不機嫌そうに言葉を漏らす。表面では余裕の表情を浮かべる少女達だが、幽々子の圧倒的な実力を感じているのは間違いない。

誰も、次なる攻撃を仕掛けようとはしない。

「死蝶はやがて地に積もり、新たな地を作り上げる。それは生命が死に、土に変わることとなんら変わりのないこと」

いつしか幽々子は縁側に座り、瞳を閉じていた。

「・・・春を置いてゆきなさい。あなたたちが土に還る時は、まだ先のはずよ?」

少女達が引き返すとは思っていない。引き返すくらいなら、初めから訪れることもないだろう。

「私のスパークを受けないつもりか？そいつは無茶な話だぜ」

「寒いまだとお嬢様が安眠出来ませんの。帰る訳にはいきませんわ」

「そういうことよ。大人しく桜の下に堕ちることね」

力もない癖に、強がりだけは一人前。・・・昔の私も、ああだったのかしら。

幽々子は両手にもつ扇を空高く掲げ、そして呟いた。

「蝶符・・・」

扇に纏う光が、さらに強さを増してゆく。その妖しき光、まさに死霊の如し。

「鳳凰紋の死槍」

その槍は舞い踊る死蝶を焦がし、張られた結界を無惨に破り。

そして、全てを貫いた。

ほとけには

桜の花を

たてまつれ

我が後の世を

人とぶらはば

後編

死へ誘う事がどれだけ簡単なことか

生を与える事がどれだけ難儀なことか

強大な妖に飲まれた儂く小さな命を糧に桜は、妖は満開を迎える。

幾千年と待ち焦がれたその時が、今訪れる

訪れるはずだった。

「咎重き 桜の花の 黄泉の国」

不意に響くその声は、場の全てを諭すかのように穏やかで、しかし不気味。

「生きては見れず 死しても見れず」

どんなに強靱な矛をも夢と化してしまう、夢と現の境界の持ち主。

「お久しぶりね、幽々子」

白い衣服に身を包んだ少女は、その手に大きな弔傘を提げて空間の歪みを作り出していた。

「・・・紫？」

「駄目じゃないの、むやみに人間を殺したりしたら」

紫と呼ばれた少女は不敵な笑みを浮かべながら幽々子と対峙する。

「な、なんなの、あんた」

「人間を取って食う妖怪よ。普段はね」

空間の歪みのすぐ後ろ、紅白の巫女はぺたんと手をついて座りこむ。

「貴女が今頃何の用なの？」

「随分な言い方ねえ。旧友との再会よ？もう少し喜んでもらってもいいんじゃないの？」

「あら、ごめんなさい。今はあいにく取り込み中なのよ」

「妖を復活させる。それがとても愚かなことに気付いていないのかしら？」

「
」

幽々子が幽々子である限り、この封印が解けることはない。

それに気付かず、冥界を生きることがどれほど惨いことか。

ただ満開を願い、ただ妖の復活を願う。

其が為だけに此処に留まることがどれほど残酷なことか。

桜は散り、また咲き乱れ、そして散る。

しかし貴女は桜ではない。似て否なるもの。

決して、散ることはないの。

幽々子もまた紅白の巫女のように手をつき、膝をついた。目の前に咲き誇るはずだった妖は、既にその花びらを落としはじめている。

「分かったかしら？ 貴女の望むものは、貴女がいる限り永遠に手に入ることはないの」

幽々子の頬を、何層にも連なった涙が筋を描いていた。

取り返しのつかない程の時間が過ぎてしまった。私は多大な犠牲を払って、その時を過ごしてしまった。

事実を知った時、絶望しか残らなかった。

最後には何も残らない。それが、究極の真実。

もう希望すら残されていない。ここに留まる意義すら見出だせない。

「貴女には、私がいるわ」

紫はそう言って、幽々子をそつと抱きしめた。

「辛かったでしょう。苦しかったでしょう。事実を知らずに生きる事が、どれだけ辛いことか・・・」

幽々子は顔をあげる事もなく、紫の胸にうずくまったままでいた。

「過去は取り戻せばいい。貴女には、貴女を慕ってくれる者がいるんでしょっ？」

これほどに温かいと感じたのは初めてかもしれない。

「怖いなら、いつでも私を頼りなさいな。何が真実なのか、それくらいなら教えてあげるから」

胸にあった悔しさ、もどかしさは既に消え去っていた。

「そう、貴女には、私がいるんだから・・・」

桜は既に散り、春の終わりを告げようとしていた。

縁側に座るのは、空を見上げる少女。

その表情に、憂いはない。

「幽々子様ー、桜餅買ってきましたー」

「あら、ありがとう妖夢。一人でおつかい出来るようになったのね」

「もう、バカにしないでくださいよ」

妖は枯れることなく、いつまでも此処にそびえ立つだろう。

それを満開にするために此処に留まったというのに、今はそんなこと、どうでもいい。

私には、私を慕う者がいる。

「どうしたんです、幽々子様？」

真実は、それだけでいい。

「これから、よろしくね」

後編（後書き）

長期休載はありましたが、無事完結することが出来ました。原作の設定と若干異なる部分もありますが、単なる小説と割り切っていたできれば（笑）。ここまで読んで下さった方、本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1769d/>

幽雅に咲かせ、冥々の西行妖

2010年10月13日20時24分発行